

# 2024年度 人間環境学コロキウム 報告書

## テーマ 揺らぐ「境界」

日時：2024年7月24日（水）14:50～18:10（4限・5限）

場所：九州大学伊都キャンパス イーストゾーン 大講義室II

### 1 実施概要について

#### 1-1 揺らぐ「境界」

「人間環境学コロキウム」は、九州大学大学院人間環境学府の学生による実行委員会が主催する学際シンポジウムである。人間環境学府は、建築学、社会学、文化人類学、心理学、教育学などの複数の領域で構成されており、これら「人間環境学」の可能性を学際的に探ることを目的としている。本年度は「揺らぐ「境界」」をテーマとし、教育学、社会学、情報科学の各分野から講師を招いて講義を行い、さらに専攻内外の学生とともに意見を共有する。このことによって、自分自身の専門以外の学問分野の知見と触れ合いつつ、私たちが自明としている境界の揺らぎについて考えることを目指す。

世界には、様々な境界線が存在している。性別、国境、人種をはじめ、人間環境学コロキウム委員らが所属する人間環境学府の中にも、学問分野ごとの境界線が存在していること考えれば、それらは枚挙にいとまがない。私たち人間は、そうしたあるものとあるもの間に引かれている境界線の蓄積によって形成され、また世界自体もそうした境界線の蓄積によって形成されているといえよう。そして私たちは、そうした境界線に自覚的、あるいは無自覚的に影響され、時にはその境界線を自明なものとして生活をしている。

こうした境界線は、あるものとあるものを区別するという役割を果たす。それゆえ、個人や社会の分断をもたらす要因となることもある。例えば、国境は国家と国家の間に引かれ両者を区別する機能を果たしているが、それが国家間の戦争を引き起こす要因ともなる。また、学際的な人間環境学府の中にも、学問分野ごとの境界線が概念的・物理的に存在し、それが学府内での交流を阻害する一つの要因ともなる。さらに、区別されることで境界線の向こう側に存在するものへの思慮も困難になることが考えられる。一方で、境界線が引かれ、あるものとあるものが区別されることは、必ずしも消極的な側面ばかりではないのではないか。境界線を引き区別することで、それまで認識できなかったものを認識できるようになり、それが困難を解消することにつながることもあるだろう。

以上のような境界線については、人間環境学コロキウム委員内で議論を進める中で、そうした境界線はもともと存在しておらず、政治、制度、科学技術など、「何かしらの力」によって引かれ、意識化されるものであるという結論に達した。であるからこそ私たち人間は、私たち自身や世界を形成する境界線を自覚的に問い続けなければならない。

よって本年度のコロキウムでは、私たち人間や世界を形成する（そして時には自明とされている）境界について様々な学問分野の視点から再考し、自分自身の専門以外の学問分野の知見とも触れ合いながら、これまで私たちが自明としていた境界の揺らぎについて考えることを目指した。

## 1-2 参加対象者

九州大学の学生及び教職員・近隣大学の学生等

例年は人間環境学府の開講科目である「人間環境学」の受講生の中の希望者をコロキウム参加者として募集していた。しかし今年度は「境界」を越えて様々な所属やバックグラウンドを持つ多くの人に参加してもらうことで、多様な価値観や意見を受け入れ議論をより深めることをねらい、九州大学の全ての学生のほか、近隣の他大学の学生等からも参加者を募集した。

## 1-3 広報活動

2024年度「人間環境学」の受講生に対しては、講義時間の一部を使用して、広報および参加募集を行った。

また、フライヤーを作成し、九州大学伊都キャンパスを中心とした学内の各所にフライヤーの掲示を行った。学内の掲示については各エリアの学務に許可を得た上で掲示した。また、学外からも参加者を募集するため、福岡大学にも許可を得てフライヤーを送付した。フライヤーの送付先一覧は以下の通り。

配布先	部数	配布先	部数
生協食堂 センター イースト ウエスト	2	理学部等事務部	3
		農学部等事務部	3
	1	芸術工学部等事務部	2
	2	人文社会科学系事務部	4
生協（皎皎舎）	1	中央図書館	1
総合体育館	1	福岡大学	5
工学部等事務部	3		

## 1-4 当日のスケジュール

### 第1部 (14:50~16:20 (4限))

- ・オープニング

実行委員長からのあいさつ、開催趣旨の説明、スケジュールの説明 (約15分)

- ・3名の講師による講義 (各20分)

「境界」をキーワードとした各講師による講義

### 休憩 (16:20~16:40)

### 第2部 (16:40~18:10 (5限))

- ・座談会 (20分×2クール)

講師ごとに3つのブースに分かれ、講義を聞いて考えたことについて、講師と参加者らで話し合った。参加者はブースを自由に移動し、複数の講師と意見交換を行うことも可能とした。

## 2 内容について

### 2-1 講師紹介

#### ①江口怜先生

摂南大学現代社会学部 講師

博士 (教育学)

歴史社会学 / マイノリティ教育論 / 教育福祉論 / 人権教育論 / 日本教育史 / 教育学

#### ②高野茂先生

九州大学システム LSI 研究センター 准教授

公益財団法人九州先端科学技術研究所

博士 (理学)

都市 OS / ICT 見守り / 画像処理 / 知能情報学 / 人工知能

#### ③高橋沙奈美先生

九州大学人間環境学研究院 講師

博士 (学術)

宗教学 / 地域研究 / 人類学 / ロシアとウクライナの正教会

## 2-2 講師による講義概要

### ①江口先生

江口先生からは夜間中学を通した話から教育制度の境界の捉え方についてご講義いただいた。以下に講義の要点をまとめる。

- ・学校教育制度、特に国家・地域内の「すべての人」を対象に据える強い規範性を持つ義務教育制度においては、国家・社会の「中心周縁」関係に影響を受けながら様々な境界線問題が生じる。
- ・「特別な学校や学級」がつくられたり、廃止されたり、役割を変えたりする、そのダイナミズムの中に社会の象徴的な変化が現れる。
- ・「制度の境界」において、「法令で示された境界線」と「実際に多様な社会的力学のなかで引かれる境界線」は異なる。ふたつの境界線の緊張関係のなかに、その時代・地域の課題が集約される。
- ・夜間中学で学ぶ人たちは、一国社会の中で周縁化された人々であり、また国境をまたぐ移動を経験した越境者であることが多い。
- ・境界（線）をなくすというよりも、その境界を見つめ、より公正な社会に向けて適切な線引きのあり方を問い続ける営みが重要ではないか。

### ②高野先生

高野先生からは、AI との向き合い方に関する話から「あなたは AI と共に生きていきますか?」、「AI がないと生きていけないですか?」という二つの問いを投げかけられた。以下に講義の要点をまとめる。

- ・AI とは? 「人間が持つ知的な情報処理能力を機械に持たせること」や「周囲状況（入力）によって行動（出力）を変える能力を持つ機械」のこと。
- ・AI カメラを用いた移動困難者支援サービス（昭和バスにおける取組）や人流データの活用（福岡市都心部の人流データ収集）が進められており、これをビジネス戦略や都市計画に貢献することができる。
- ・一方で、フィルターバブル（レコメンドを通じて情報のバイアスがかかってしまう）、ハルシネーション（生成 AI が事実と異なることをもっともらしく回答）、ディープフェイクなど AI の進化に伴う問題も。
- ・AI と共に生きる（コンヴィヴィアルな関係）ために、現状は弱い AI を最大限に活用し、日々の業務や勉強における効率化や自己研鑽を積むことが重要。

### ③高橋先生

高橋先生からは、ロシアウクライナ戦争を入口として、ウクライナの歴史的な多様性・多層性・多重性の話を通して、境界とは何かということについてご講義いただいた。以下に講義の要点をまとめる。

・境界とは本質的に揺らぎ続けるものである。空間を区切ることは、人間の社会組織に共通に見られるかもしれないが、厳密に言えば、境界とは、それ自体が自然な現象ではない。また、境界は単なる線ではなく、境界地域という枠組みがある。

・現状の境界／国境の正当性が依拠するのは、国際法か（国家主権、国内問題不干渉、領土保全）？それとも民族自決権か（人権尊重、人道的介入）？

・ロシア語を母語とするウクライナ人やロシアと正教信仰を共有するウクライナ人といったロシア・ウクライナにおける境界領域（ボーダーランズ）をどうとらえるか？彼らを「ロシア世界」というイデオロギーに組み込めば、それはロシアのプロパガンダに資することになるのか？

## 2-3 座談会の様子

人間環境学府の各専攻に所属する学生らを中心に、講師の先生方の講義内容についての質問や、意見の共有が活発に行われた。各ブースを自由に移動することができるようにしたことで、参加者は議論の途中でもブースを移動し、多様なバックグラウンドを持つ他の参加者との交流をすることができた。



## 3 おわりに

実行委員会の発足から当日まで、テーマ設定、講師の先生方への依頼、実施方式の決定、ポスター作成など、多くの時間を費やした。実行委員会の学生らにとって、初めて経験することの連続であり、決して全てが円滑に進んだわけではない。しかし、実行委員会のメンバーのみならず、ご講義いただいた3人の先生方、諸手続きの窓口となっていたいただいた人間環境学研究院の先生方、そして当日参加し活発な議論を繰り広げた参加者のみなさんの協力によって、今年度の人間環境学コロキウムを無事終えることができた。改めて、感謝の意を表したい。